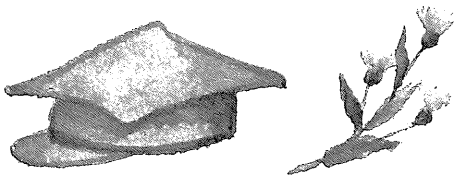
大学入試の歴史（第13回）

捲土重来あるいは転進



名古屋大学教育学部教授
佐々木　享

はじめに

戦前の入試の歴史をあれこれ調べていて気にかかっていることのひとつは，官立の高校・大学予科や専門学校の入試では，ほとんど例外なしに合格者より不合格者の方が多かったことである。昭和期に入ると東京帝大でも合格者より不合格者の方が多いという事態が生まれ，深刻化していた。しかし，合格者の経歴が（ひそかに）誇らし気に語られることは多いが，一度は合格しなかった者が辿った道が語られることは非常に少ない。

秀才の誉れ高かったことをしめす伝記的関心からはそれでもよいであろうが，歴史の事実を語る観点からすると，多数派を無視することが気にかかっているわけである。

そこで今回は，入試に落ちるという点に焦点を合わせて，若干の話題を拾ってみる。

最終学歴に至る経路

新聞などの人物紹介，書物に付された著者紹介には，たいていその人の最終学歴が掲げられている。換言すると，最終学歴に到達するまでの経路を掲げていることは滅多にない。たとえば近頃犬好きの人間で好感をもって読まれている中野孝次『ハラスのいた日々』（1987年，文芸春秋）の奥付に記された著者紹介には，「1925年，千葉県に生まれる。東京大学文学部卒業」と記されている。犬について書いたノンフィクションだから，著者の学歴にことさら関心を持つ人はいないとの想定でこう記したのであろう。ところがこの中野孝次という人は，高等小学校まですすんだあと，独学で「高検」つまり高等学校入学者資格試験に通り，２年間予備校に通ったあと，２度目の挑戦で五高にすすみ，あとは順調に東大文学部独文科を卒業したという，珍しい経歴をもった人である（中野孝次『わが体験的教育論』岩波新書）。中野の場合は，小学校尋常科，中学校４修，高校，大学という最短コースにくらべると３年間程遅れたことになる。すぐあとでのべるように，当時は中卒後１年間浪人してから高校に入学するのはごくふつうであったから，中野はふつうより１年遅れた程度であった。

中野の場合は，予備校を経たといってもその前歴が普通でないから開けっ広げに語られているが，多くの場合には闇のなかにかくされてしまっているのである。

高校入学者の最多は中卒，ついで一浪

戦前，とくに昭和期における上級学校入試をめぐる競争の激しさは，今日の大学入試の競争の比ではなかった。

中学校からの進学競争がとくに厳しかった。試みに，入試期日が全校同一であったことがわかっている官立高校の入試における競争状況を1935～1941年についてみると，表1の如くであった*。

＊　この年の官立実業専門学校の入試期日は，高工，高商，高農，いずれも2班に分けられていた。官立高校は1校しか受けられなかったが，専門学校は最低でも2校を受けることはできた。

1938年までは，白線浪人対策で高校の入学定員が圧縮されていたためもあって，入試競争は

表1　官立高校高等科の受験者・入学者の入学前の卒業年次（文・理計，1935～1941年）

		前年度中学4修見込	過年度中4修了者	前年度中卒見込	中学校卒業 前々年度	2年前	3年前	4年以上前	計
S．10	入学者	614	26	1,561	1,169	382	82	42	3,876
		(15.9)	(0.7)	(40.2)	(30.1)	(9.8)	(2.1)	(1.1)	(100.0)
	受験者	7,494	286	8,404	5,068	2,001	548	342	24,143
		(31.0)	(1.2)	(34.8)	(21.0)	(8.3)	(2.3)	(1.5)	(100.0)
	合格率	8.2	9.1	18.6	23.1	19.1	15.0	12.3	16.1
S．11	入学者	669	18	1,465	1,189	428	80	31	3,880
		(17.2)	(0.5)	(37.7)	(30.6)	(11.0)	(2.1)	(0.8)	(100.0)
	受験者	7,403	219	7,894	4,941	2,037	651	346	23,491
		(31.1)	(0.9)	(33.7)	(21.1)	(8.7)	(2.8)	(1.5)	(100.0)
	合格率	9.0	8.2	18.6	24.1	21.0	12.3	9.0	16.5
S．12	入学者	721	14	1,518	1,106	414	88	35	3,896
		(18.5)	(0.4)	(38.9)	(28.4)	(10.6)	(2.3)	(0.9)	(100.0)
	受験者	8,565	181	8,859	5,245	2,230	735	402	26,217
		(32.6)	(0.7)	(33.7)	(20.0)	(8.7)	(2.8)	(1.5)	(100.0)
	合格率	8.4	7.7	17.1	21.1	18.6	12.0	8.7	14.9
S．13	入学者	653	18	1,617	1,139	388	68	28	3,911
		(17.7)	(0.5)	(41.3)	(29.2)	(9.9)	(1.7)	(0.7)	(100.0)
	受験者	8,531	189	9,441	5,475	2,303	693	390	27,022
		(31.6)	(0.7)	(35.0)	(20.2)	(8.5)	(2.6)	(1.4)	(100.0)
	合格率	7.7	9.5	17.1	20.8	16.8	9.8	7.2	14.5
S．14	入学者	821	21	2,088	1,640	570	104	41	5,285
		(15.5)	(0.4)	(39.4)	(31.0)	(10.8)	(2.0)	(0.8)	(100.0)
	受験者	9,310	164	10,046	6,044	2,457	648	360	29,029
		(32.1)	(0.6)	(34.6)	(20.8)	(8.5)	(2.2)	(1.3)	(100.0)
	合格率	8.8	12.8	20.8	27.1	23.2	16.0	11.4	18.2
S．15	入学者	900	10	2,516	1,562	371	48	8	5,415
		(16.6)	(0.2)	(46.4)	(28.8)	(6.8)	(0.9)	(0.1)	(100.0)
	受験者	9,218	146	11,174	5,750	1,925	401	239	28,853
		(31.9)	(0.5)	(38.7)	(19.9)	(6.7)	(1.4)	(0.8)	(100.0)
	合格率	9.8	6.8	22.5	27.2	19.3	12.0	3.3	18.8
S．16	入学者	1,552	16	3,170	1,695	306	39	13	6,791
		(22.8)	(0.2)	(46.7)	(24.9)	(4.5)	(0.6)	(0.1)	(100.0)
	受験者	12,642	140	13,494	7,193	2,200	460	282	36,411
		(34.7)	(0.4)	(37.1)	(19.7)	(6.0)	(1.2)	(0.8)	(100.0)
	合格率	12.3	11.4	23.5	23.6	13.9	8.5	4.6	18.6

備考）1．高等学校高等科入学資格試験合格者は中学校4年修了の欄に，専門学校入学者検定規程に依る試験合格者は中学校卒業の欄にそれぞれ含めてある。
2．高等学校高等科入学資格試験合格未定者は中学校4年修了見込の欄にふくめてある。
3．実業学校卒業者，師範学校卒業者は中学校卒業者の欄に，また現に在学中の者は中卒見込の欄に，それぞれ含めた。
4．当該高等学校尋常科修了者は除いてある。
5．「中学校4修」の欄には，中学校4年を修了し5年に在学しなかった者を掲げてある。

出典）文部省専門学務局『高等学校高等科入学者選抜ニ関スル調』各年版による。

ひときわ厳しく，官立高校25校の平均合格率は僅か15％程度であった。100人の受験者中85人は落とされたわけである。この表では内訳をしめさなかったが，競争率は例年文科より理科の方がやや厳しかった。

また，煩瑣になるので表では省略してしまったが，中学校以外のいわゆる傍系学歴の志願者は，実業専門学校の場合と違って極端に少なく，例年受験者の１％前後に過ぎなかった。とくに作家中野孝次が辿ったように高検あるいは専検つまり独学で受験資格を取得した志願者は少なかった。1935年を例にとると，高検，専検合格の受験者は25校全体で計106名（全受験者の0.4％），合格者は７名に過ぎない。高検とほぼ同程度とみられていた専検合格者数は，この時期，年々500名前後であった。彼らは，いわゆる正系である中学校出身者にさえ厳しいのだからと，官立高校に挑戦することを初めからあきらめたのであろう。

この時期の高校高等科（あるいは大学予科）への正規の最短コースたる受験資格は中学校４年修了見込者であった。この最短コースの受験者は，例年受験者の30％程であった。受験者の７割近くはいわゆる浪人*だったのである。

＊　中学校４年修了の段階では受験しなかった者もいたであろうが，ここでは受験したものと仮定している。

中学４年修了者だけをいわゆる現役とみなすと，現役での合格率は，1945年まで10％を超えたことはなかった。10人中９人は確実に落ちたわけである。

こうして圧倒的に多くの者は，捲土重来を期して中学校５年卒，さらに浪人して受験した。中卒から入学する者が最も多かったとはいえ，その合格率は1938年までは20％に満たず，戦時経済体制に対応するために高校の募集定員が旧に復して増加した1939年以降においても，20％を僅かに超える程度であった。

最も合格率が高かったのは中卒１年後，つまり中学４修から受験したとすれば３回目の受験，中卒から受験したとすれば２回目の挑戦であったが，それでもその合格率が30％に達することはなかった。

1939年以降，ほんの僅か変化が見え始めた。変わったことのひとつは，全体として合格率が数ポイント上昇したことである。それでも受験者の８割以上が不合格の憂き目を見なければならないことに，変わりはなかった。

本土の学校がダメなら植民地の学校へ

木原均（1893～　）は1973年には文化勲章を授与された著名な遺伝学者であり，冬期オリンピック選手団長を２度務めたスポーツマンとしても知られている。彼は，自ら語ったところでは，同じ東北帝大農科大学の予科に３度受験し，３度目に（やっと？）合格したのであった（ＮＨＫ編『わたしの自叙伝(1)』日本放送出版協会）。彼の経歴はたんに1918年北海道帝大農学部卒と記されているに過ぎないことが多いが，大学者にはストレート進学組が多いことなど考え合わせると，注目すべき事例のひとつである。ちなみに木原が受験した時の同予科の競争率は表２の如くであり，後年の官立高校の競争率にくらべると，ずっと緩やかなものであった。

表２　東北帝大農科大学予科の入学志願者・入学者（1910～1912年）

	入学志願者	入　学　者	合　格　率
1910	230	101	43.9
1911	362	96	26.5
1912	304	100	32.9

各年の『文部省年報』による。

木原のように同じ学校に何度も挑戦した者もあったが，学校を変えた人もいた。山田浩蔵（東京帝大第二工学部卒，前日本鋼管副社長）は，今岡和彦『東京大学第二工学部』（1987年，講談社）のなかで，「僕は，入試では高等学校のときに苦い経験をしているんです。仙台の二高を受けて失敗し，一年浪人して再挑戦したのがまたも駄目。第二志望の山形高校にも落ちて，結局，満州に設立されたばかりの旅順高校に流れていったんですよ。……」と語っている。

旅順高等学校は1940（昭和15）年に植民地の旅順に設立された。尋常科は置かず，高等科のみであった。学科課程や卒業者の大学入学資格等はすべて本土の高校のそれと同一である（官立学校であったが植民地政庁たる関東局所管のため，『文部省年報』等には記載されていない）。

神奈川県にあった浅野綜合中学校出身の山田は，旅順高校理科に2期生として1941年に入学している。同年の同校入学者の出身地方別内訳は表3の如くであった。

旅順高校はがんらい植民地在住の子弟のために設立された学校であったが，内地出身者が大量に押しかけたため（全受験者の62%を占めた），18倍という厳しい競争率になっていた。平均合格率は僅か5.5%であった（もし内地からの受験者がゼロだったとすると，合格率は14%と内地の高校のそれに近い数値になる）。

内地からの志願者の合格率は，朝鮮，台湾からの志願者と並んでひじょうに低く，理科3.3%，文科に至っては1.9%に過ぎなかった。これらの数値は，山田がそうであったように，内地での高校受験に失敗を重ねた者が新設の旅順高校を穴場とみて押し寄せたことを示唆している。しかし，山田の名誉のためにいえば，内地の高校に例を見ない厳しさは，旅順高校が決して穴場ではなかったことをも示しているわけである。

表3　旅順高校の入学志願者・入学者（1941年）

		内地	関東州	満州	その他（朝鮮・台湾等）	計
文科	入学者	20	38	16	2	76
		(26.3)	(50.0)	(21.1)	(2.6)	(100.0)
	入学志願者	1,062	322	222	204	1,810
		(58.7)	(17.8)	(12.3)	(11.3)	(100.0)
	合格率	1.9	11.8	7.2	1.0	4.2
理科	入学者	34	44	32	2	112
		(30.4)	(39.3)	(28.6)	(1.8)	(100.0)
	入学志願者	1,043	233	171	162	1,609
		(64.8)	(14.5)	(10.6)	(10.1)	(100.0)
	合格率	3.3	18.9	18.7	1.2	7.0
計	入学者	54	82	48	4	188
		(28.7)	(43.6)	(25.5)	(2.1)	(100.0)
	入学志願者	2,105	555	393	366	3,419
		(61.6)	(16.2)	(11.5)	(10.7)	(100.0)
	合格率	2.6	14.8	12.2	1.1	5.5

『旅順高等学校一覧　自昭和16年4月至昭和17年3月』による

転　進

前掲の表1によると，官立高校の受験者は年々少しずつ増加している。しかしその増え方は，毎年2万人以上の不合格者が出ていることにくらべると，僅かなものである。この事実は，一度，二度は挑戦しても，その後はあきらめるか他に転進した者が多いことを示唆している。

「転進」ということばは，ほんらい，針路あるいは進路を転ずることを意味するが，戦中世代には，1943年2月，ガダルカナル島攻防戦において日本軍が壊滅的打撃を受けて撤退した際に，わが軍は「転進」したと政府が発表したことによって強く印象づけられている。受験戦争における転進は後者の意味の方がふさわしい。「転進」の内実を語る者が滅多にないことも，何やら戦時中の政府の態度に似ている。

安岡章太郎の小説「青葉しげれる」は，受験戦争における転進の様相を詳細に描いている。

主人公順太郎は，「最初のとし，四国の温泉のある土地の高等学校〔松山高校〕をうけ」て落ちた。「このときは試しだった」。「次のとしは，いくらか真剣だったから一層入学のやさしいという評判の，もう少し南の方へ出掛けた」が，試験の前日「特殊のカフェー」でしたたか飲まされて失敗した。「翌年は方角を変えて東北の雪にうずもれた学校〔弘前高校か山形高校〕を目指したが」「やはり落ちた」。

「このとしまでは官立の高等学校しか受けなかった。しかし，こんどはもうそんなことは云っていられなくなった。徴兵検査の適齢期〔前年12月１日からその年の11月30日までに満20歳に達する年齢〕がやってきてしまったからだ」。そこで順太郎は，こんどは官立高校のほか，「どこの学校でも入れるところへ行けばいい」と思って私立のＺ大学予科を受けたが，またしも両方とも落ちてしまう。

「何はともあれ，一応徴集延期の特典をもった学校に籍だけでも置く必要」に迫られた順太郎は，「外濠（そとぼり）の濠端にある理数学校」に入学手続をとった。私立の理数科学校〔東京理科大学の前身である東京物理学校を暗示している〕では，当時，入学資格のある者については入試なしで入学させていたからである。しかし，彼がこの年に実際に通い始めたのは，理数科学校ではなく前年と同じ某予備校であった。「青葉しげれる」ではこの後のことまでは書かれていない。

志願者は誰でも無試験で入学させたが，入学後の試験は厳格だったという東京物理学校についての評判を，筆者も聞いたことがある。実相は知らない。たとえば1938年の『文部省年報』によると，この年の同校の志願者は5,219名，入学者は1,635名とある。選抜が実施されたのか，志願しても入学しなかった者が多かったのかはわかりかねる。一方，この時期の同校の『学校一覧』には，生徒数や生徒氏名が記載されているのは第２学年からで，第１学年生徒についての記載がない。無選抜で入学させるが，第１学年末の厳格な試験を通って初めて本校生徒と言えるのだと語っている如くである。

いずれにせよ，東京には徴兵逃れのためにもぐり込めるような学校がいくつかあったらしい。

もう一つの安岡の小篇「相も変らず」では，官立高校を失敗した主人公は，「官立の高等学校しか受けさせない」と云っていた母親が「Ｐ大には評判のいい医学部があるから，それならばいい」と云いだしたことをとらえ，偽って同じＰ大の文科に入学している。

いずれもフィクションだがそこには作者の実体験の何がしかが投影されているといわれており，当時の転進の様を見ることができるように思われる。

入試に落ちて，全く方向転換した人もいたことはいうまでもない。1912年に高校進学では全国に知られた東京府立一中を卒業した福原駿雄は，卒業の年と翌年，同じ一高（第一高等学校）を受験したが，ともに失敗した。福原は３度目に挑戦することなく，活弁（活動弁士，無声映画時代の語り手）となった。かくて当時すでに無双といわれた弁士・徳川夢声が誕生した。徳川夢声が声優，俳優，随筆など多才な活動をしたことはよく知られている。福原が一高に受かっていたら，彼には違う道が開けたであろうから，私たちはあの名調子の連続朗読「宮本武蔵」を聞くこともできなかったにちがいない。